

## 佐久間OB祝辞

海上自衛隊が60回目の誕生日を迎えたことは、誠におめでたく心からお祝い申し上げます。また、この60年の間を振り返り、感慨深いものがあります。

私は海上自衛隊の骨幹を創られた先輩として、山本善雄元海軍少将、吉田英三元海軍大佐、元海軍中佐の中山定義第4代海上幕僚長を考えております。

山本少将については、先ほど海幕長の式辞でも述べられました。皆さん御承知だと思いますが、昭和26年10月、時の政府の要請を受けて当時の海上保安庁長官であった柳沢長官らと共に米国から貸与される艦艇を受け入れる組織を整備するために尽力され、半年間、約30回にわたる会議と各種の作業の成果は60年前の4月26日、海上自衛隊の前身である海上警備隊創設となって結実しました。その日が海上自衛隊の誕生日となりました。それは太平洋戦争の敗戦によって占領軍の支配下に置かれていた我が国が、晴れて独立を回復する2日前のことでありました。

吉田英三大佐、以下海軍からのならいに従って、諸先輩を「さん付け」で呼ばせていただきます。

吉田さんは、Y委員会の中心的なメンバーでありました。海上警備隊の創設が、わずか半年間という短い準備期間で実現したことは、敗戦後の厳しい環境の中で海軍再建のために秘かに研究作業を続けられた吉田さん達のグループの御尽力の御陰であると伝えられます。吉田さんは海上警備隊創設について強固な信念をお持ちでありました。それは、新しく創られるこの組織は、「国土と民族を防衛するためには、私的犠牲を顧みないという、崇高な精神を根源にすべきである」というものであります。

この信念は「事に臨んで危険を顧みず」という自衛官の宣誓に通じるものであり、それは海上自衛隊の長年にわたる任務遂行、殊に国外における実任務の活動や昨年の東日本大震災における災害派遣活動等の支えになってきたと信じております。

今から10年前、NHKの限られた人達が海幕の承諾を得て、Y委員会関係の資料を閲覧、熟読、さらに、その裏付けの取材を国内外で行われて、NHKスペシャル番組「海上自衛隊はこうして生まれた」という番組を制作されました。さらに、その放送の翌年、平成15年、この番組を制作された趣旨、Y委員会の検討状況、米海軍の親身な支援協力などを文章に表して同じタイトルの本を出版されました。この本には、Y委員会関係だけでなく、当時インド洋へ派遣された部隊の現場取材による生々しい状況、海上自衛隊創設50周年記念式典における当時の石川海幕長の式辞とその意味、式典会場の情景も記されております。私はこの本は、海上自衛隊誕生の経緯を記した信頼出来る正確な記録と認識しております。この番組制作、執筆に当たられた人々は公正で客観的な視点を貫かれ、Y委員会のメンバーの中で吉田さんが中心的な役割を果たされたことに焦点を当たられました。

私は誠に見事な見識と感服いたしました。これらの人々は、この番組制作の前後に、海軍と自衛隊の姿に正面から取り組んだ番組を制作、放送されました。その方々は、今日この会場にお見えになっておられます。

海上自衛隊は今述べました3人の大先輩に加えて、多くの優れた指導者を得ました。板谷隆一海幕長・統幕議長は「戦艦大和を旗艦とする水上特攻部隊」の一員として沖縄作戦に参加された経験の持主でありましたが、剛毅果敢、しかも情に篤く、ユーモアに溢れた人柄で、私達に安心感を与えて頂きました。私は板谷さんの副官としてお側に仕える幸運に恵まれましたが、あるとき「沖縄作戦では乗っておられた艦が沈んで大変だったでしょう」と申し上げますと「いや、あれは泳いでいるときにポケットの中に羊羹が入っていたんで、それを食べた。塩味が付いて美味しかったよ」といった風でありました。

また板谷さんが議長の時代は70年安保闘争の時期であり、毎日のように各地で騒動が起っておりまして。私は板谷さんが毎日通勤される車の経路を変えたり、万一暴徒に襲われたときの対応について、警務隊の人々と相談したり致しましたが、板谷さんはそれらを一笑に付され「副官よりも俺の方が強そうだから、何かあったら、俺が守ってやるよ」と言われました。

万が一、本当にそういう事態が起こったら、板谷さんはそうしていただけたと思います。涙が出るような、ありがたいお言葉でありました。板谷さんは、退官される前日まで昼休みはバレーボールを楽しまれました。

板谷さんが海幕人事課長時代、当時厳しいことで有名であった海幕長から呼ばれているという連絡を受けても「今は昼休みでバレーボールをやっている」と言って、そのままバレーのプレーを続けられたと聞いております。

板谷さんがこの世を去られたのは、私が現役時代の最後の頃でありました。

北海道で陸上自衛隊の北方総監、志方さん、今でも元気で活躍しておられますが、この方が「ビッグレスキュー」という名前の災害救助訓練、大規模な訓練を行われ、私もお声がかかったので現地へまいりました。

終わって東京に着いたとき車で、入院しておられた板谷さんの容態が急変したという知らせを受けて、三宿病院へ直行しましたが、最期のお別れは叶いませんでした。板谷さんの奥様が「板谷は、あなたが帰ってくるのを待っていたのよ。」と言われて、お答えする言葉もありませんでした。

また、私心の全くない、私どもにとって神様のような存在であった内田一臣海幕長、中村悌次海幕長、御家族を長崎の原爆で失いながら、悲しみを見せること無く貴重な教えをいただいた大賀良平海幕長、温かい人柄と包容力で無類の求心力を発揮された吉田學海幕長、そういった優れたリーダーが、海上自衛隊が進むべき航路を拓かれました。

これらの先輩が遺された貴重な記録：中山さんの「艦橋余話」、板谷さんの「左警戒右見張」、内田さんの「海」は、海幕が購入又は増刷して各部隊等に配布されたと承知しております。これらは、何れも要職にありながら記されたものであり、海上自衛隊と海そのものに対する深い愛情が伝わってきます。

そういった方達だけでなく、おそらく名を残すことも無く職務を終えられたであろう人々を含め、多くの海上自衛官が、先輩が拓かれた航路を厳しい波風と闘いなが

ら、ひたむきに誠実な態度で航海を続けられ、今日の海上自衛隊を築き上げられました。

その中には、先ほど海幕長式辞にあったように、志半ばにして職に殉ぜられた人々があつたこと、その方々と御遺族の想いを決して忘れてはならないと考えます。

再び吉田さんについて述べさせていただきます。今では考えられませんが、吉田さんは横須賀地方総監、自衛艦隊司令、その時はまだ司令官という名前ではありませんでした。そして2度目の横総監を経て、昭和33年私たち幹候8期生が実習幹部として参加した海上自衛隊の2回目の遠洋航海の部隊指揮官、練習隊群司令を最後に、退官されました。

その遠航中、旗甲板にデッキチェアを並べて私たちに色々なお話をいただきましたが、Y委員会の功績については一言も口にされませんでした。

また、今経歴を申し上げましたが、昭和29年7月1日、海上警備隊が保安庁警備隊を経て海上自衛隊となった日に新編された自衛艦隊の初代指揮官に就任されました。

新編直後、艦隊集合訓練を行われ、それが終わったときに次のような訓示を述べておられます。私なりにその表現を分かりやすく変えて、要点だけを述べさせていただきます。

「自衛艦隊に属する士官は、名実共に立派な統率者、海上指揮官とならなければならない。そうなる事は、連綿不断、刻苦精励を重ねなければならない、到底なし得ない至難中の至難事である。極めて難しいということであります。

我々は常に思いをここに致し、自己修練に努め、人を練り技を磨き、もって有為の海上指揮官たるを期さねばならない。」

この教えは現代においても全ての勤務に通じると考えます。優れた指揮官は、また良き部下となりえます。

海上自衛隊は伝統を重んじると言われます。伝統は私たちに勇気と安心感を与えてくれます。一方、伝統はそれを盲信するときは、単なる陋習(ろうしゅう)と化し、多くの弊害を招くこととなります。

伝統とは限りませんが、物事は誤って伝えられることがあります。Y委員会の名称がそれを主催された山本、柳沢両委員のイニシャルからとったという俗説は、Y委員会の議事録の中で完全に否定されております。

また、卑近な例ではありますが、海上自衛隊の金曜日の昼食の献立がカレーライスであるのは海軍以来伝えられたことだという向きがありますが、それは事実と異なっております。

私たちが若くして艦艇勤務をしていた頃、土曜日の日課は午前大掃除、終わってカレーライスの昼食をとって上陸、という一週間の区切りでありました。それが、週休2日制になって、昼食の献立が一日繰り上がったのだという風に受け止めております。

伝統は、新しい創造を繰り返し、それが積み上げられたものと言われます。

私が海上自衛官として勤務した生涯で最も鮮烈な印象に残っていることを述べさせていただきます。それは、ペルシャ湾へ派遣された部隊との現場での別れでありました。私は、補給艦の「ときわ」に乗って現場海域を離れましたが、その日の朝、

掃海海面に向かう掃海艇が1隻ずつラッパで敬礼をしながら、朝靄（あさもや）の中、その朝靄はサダム・フセインが石油の油田に放火した火災による煤煙でありましたが、その朝靄の中に1隻ずつ姿を消していきました。私は、それを眺めながら、このような人たちと同じ海上自衛隊員である、仲間であることを心の底から誇りに思いました。

海上自衛隊に勤務する人々が、自由闊達な気風の中で先人の足跡をたどりながら、伝統の結晶ともいふべき「己の分を守り、分を尽くす」ことによって我が国の平和を支える柱となり続けることを、期待し、信じて、お祝いの言葉とさせていただきます。本日の節目の誕生日、誠におめでとうございます。終わります。